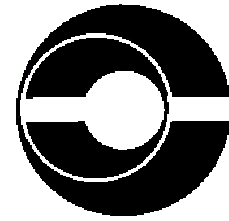


カナダ日本語教育振興会

Newsletter No. 30

Canadian Association for Japanese Language Education

ホームページ : <http://www.cajle.org>

June 10, 2005

巻頭言

日本アニメのマジックパワー

楊 暁捷

今年の二月に、JET プログラム参加者の採用面接を手伝わせてもらった。予想していた通り、個性豊かなカナダ青年の溢れんばかりのパワーに接して、心が洗われる思いだった。とりわけ印象に残ったものの中には、車椅子に乗って四百キロ以上も離れた町からやってきた一人の若者との会話があった。話を聞けば日本のアニメとの出会いが縁で、今はアニメ全般の仕事をセミプロでやっていると言う。そこでわたしも本気になって、かねてから気にしていた質問をぶつけてみた。ずばり「日本アニメのマジックパワーとは」という素朴な問いだった。だが、本当にアニメに夢中になったら、このような漠然とした質問には答えようがないと感じるものだろうか、こちらの期待した答えは戻ってこなかった。

想像するに、ディズニーアニメが確固たるマジックを持っているように、今やはるかにそれ以上の成功を収めている日本アニメもそれなりの秘密を持っているに違いない。それはなんだろうか。

まず、これに取り掛かるには、宮崎駿の作品だけを見ていても答えは見つからないと言いたい。言ってみれば、宮崎アニメは日本アニメの「花」であって、その平均像ではない。したがって、「ナウシカ」「千と千尋」や「動く城」などを見ただけでは、日本アニメの全体像を掴むには程遠い。きれいな音楽、華やかな受賞、目が眩むような宣伝や膨大な市場など、どれも日本アニメの成功の一例であって、その

——— 目次 ———

◆巻頭言	
日本アニメのマジックパワー.....	楊暁捷 1
◆活動報告	
活動報告とこれからの活動案内	
.....	清水道子・鈴木美知子 2
ようこそ、新しいCAJLE ホームページへ	
.....	西島美智子・楊暁捷 5
◆年次大会	
CAJLE2005 のご案内	野呂博子 6
◆特別寄稿	
カナダ日本語教育事情西東	宇田川洋子 9
初めて「先生」と呼ばれて.....	鈴木崇夫 12
◆連載	
短歌に詠まれた日本語教育の現場.....	鷗沢梢 13
日本事情の枠組み・・・日本語教育につなげるために	
.....	王伸子 16
◆地域便り	
アトランティック部会.....	大江都 18
◆カナダ各地の学校めぐりシリーズ (9)	
マウント・アリソン大学 (ニュー・ブランズ	
ウィック州)	大江都 19
BULLETIN BOARD	王伸子 22
編集部便り	23

すべてではない。むしろこの「花」を支える葉っぱや根っこのほうに、日本アニメの本当の姿があるものだ。

実は、この「マジックパワー」という質問に、わたしは一つの答えをひそかに抱いている。それは「量」と「型」の二つの要素だ。

これまでアニメに接するメディアの主流は、テレビだった。代表的な番組となると、どれも週一回あるいは数回、場合によっては一日一話の形で放送され、しかも十年単位で続いている。驚くばかりの生産力と気が遠くなるような持続力は、一流のアニメを生み出す必須条件だと言っている。それに、そのようなアニメは、どれもはっきりしたストーリーの運び方や似たような結末を持っている。ストーリーの内容が予見できるということは、けっして悪いことではなく、むしろ見るものに安心感を与える。さらに多くのものには、料理、テニス、碁といったテーマを持たせてあるということも、ここにいう型の一部だろう。量と型、この二つの要素は、いわば大衆的な消費のニーズにしっかりと応えたアニメパ

ワーの構造だ。

ここで、日本アニメが北米など英語圏の国々にこれほどまでに広がった理由の一つを忘れてはならない。それはアニメを伝えるメディアだ。これまで主にテレビだったそれは、今ではインターネットやDVD ディスクなどを媒体として、まったく違うグループのユーザーを獲得している。字幕を付け加えるソフトの発達は、さらに伝播のスピードを速めた。いまでも製作者は著作権ということに過剰なほどに主張するむきがあるのだが、それも近いうちになんらかの変化が出てくることだろう。どうにもならない現実だとあきらめるのではなく、むしろ逆にこの新しいメディアの効用とありがたさに気づいて、新たな戦術を打ち出すものと想像する。

現在、わたしたちの日本語のクラスにやってくる学生たちの多くは、日本アニメをきっかけにして日本語、そして日本への興味を持つ。日本アニメのマジックパワーを理解し、それをいい意味で乗り越えるのを手伝うということは、日本語教師としてのこれからの課題の一つになるのかもしれない。

活動報告とこれからの活動案内

ジャーナルCAJLE (桶谷仁美)

今年度の「ジャーナルCAJLE第7号」には八本の投稿論文があり、審査にあたられた先生方からの査読結果に従い、現在、採用、再審査などの手続きを行っている。詳細は、8月の大会で発表できるものと思われる。また、今年度からの編集委員は、次の通り。谷原公男、王伸子、坂本光代、桶谷仁美(委員長)。来年度の第8号も応募開始。多数の投稿を請う！

お問い合わせ：桶谷仁美 Fax: 734-622-9636
E-mail: hoketani@emich.edu

広報部 (楊曉捷)

CAJLE ホームページは、4月半ばにその使用するサーバーをカルガリー大学に移転した。アドレスは昨年秋に開設したもの(www.cajle.org)をそのまま使用する。なお、ホームページ委員会の共同作業で、CAJLE サイトは装いを新たにしてお開通した。詳

しくは本号の「ようこそ、新しいCAJLE ホームページへ」をご参照ください。

2005 年年次大会準備経過報告 (CAJLE2005 大会委員長 野呂博子)

2004 年 8 月にビクトリア在住メンバーからなる企画委員会を発足した。これまで電子メールによる委員会で協議を重ね、実施機関、会場、テーマなど主な内容を決定。教師研修会のための招聘講師 6 名および基調講演をお願いする BC 州日本語教育振興会理事役員である本間真理氏から快諾を得た。また、研究論文発表募集の案内を日本語教育関係者また当会の会員にメールで送り、31 名の個人発表申請、3 つのパネル申請を受領した。申請者は日本、カナダ、アメリカ、スペイン、韓国、香港からと国際色豊かである。ビクトリア市内観光オプションツアーおよび懇親会の企画、決定を行う。大会開催援助金として、ビクトリア大学より合計 2500 ドルを、さらに、国際交流基金への助成金申請に対して、助成金交付の通知を受けた。例年通り、当振興会のニュースレターおよびホームページ、ATJ ニュースレター、各地の学会や教師会、メディアを通じて、年次大会開催のお知らせを送る準備を進めている。詳しくは本号の「CAJLE2005 のご案内」をご参照ください。

第 3 回理事会決議事項及び理事移動

第 1 回臨時理事会 (Nov. 23, 2004) において新理事に就任された村上陽子氏は、個人の事由により 3 月 3 日付けで理事辞退願いを提出、理事会はこれを承認した。

第 3 回理事会で審議されたこととして、①振興会で使用していたロゴ 2 つのうち、「うずうず」を今後、統一使用することに決定、②アトランティック部会の立ち上げ、③坂本光代氏のジャーナル編集部への参入を決定する。(Mar. 12, 2005) また、④ CAJLE ホームページ委員としてサイト立ち上げに

協力されたジェーン・リウ氏は個人の事由により委員を辞退した。中尾良子氏は、ホームページのリニューアル終了を以てホームページ委員を辞退した。(Apr. 18, 2005) ⑤ジャーナル CAJLE の論文投稿締切日を来年度より 1 月 15 日にすることと決定した。(Apr. 20, 2005)

オンタリオ部会 (鈴木美知子)

トロントを中心に活動を行ってきた合同部会は、今年度よりオンタリオ部会と名称を改め、担当部員一同、原点に戻って活動方針を再検討した結果、2004—2005 年度の活動方針を (1) 日本語継承語教育の啓蒙、(2) 日本語教師研修、(3) 調査プロジェクト、と大きく 3 項目に定めて活動を開始した。なお、オンタリオ部会担当者は、次の通り。中尾良子、清水道子、杉本陽子、渡並美和、鈴木美知子 (担当責任)。

(1) 日本語継承語教育の啓蒙

地元の組織と密接に提携しつつ草の根啓蒙活動を展開していく事を打ち出し、トロント移住者協会日本語プロジェクトはもとより、小さな子どもを持つ親たちの会であるベビートークスフォーラムとの提携を実現させ、講演会 2 回及び学校説明会と 3 つの行事を実施した。

① 2 回連続「家庭におけるバイリンガル教育」講演会

第 1 回講演会「乳幼児期の家庭におけるバイリンガル教育——実践的見地から——」講師: 鈴木美知子 2005 年 2 月 27 日 (日) 午後 1 時~4 時、トロント日系文化会館の AJC コートにて実施した。乳幼児期の子どもの日々は、全人格の基本作りの日々である。理想的なバイリンガル話者を育てるためには、この大切な時期にことば育てが独り歩きをしないよう、どのようにして生活の中で継承語を健やかに育てたら良いか。これについて、適時を逃さない、ほめて育てる、手出し・口出しに気をつけるなど、

10項目にわたる心得を実践的な見地から細やかに、分かりやすく説明。参加者62名が熱心に耳を傾け、特に乳幼児を育てる父母参加者一同、学び考える講演であった。

第2回講演会「バイリンガル教育の大切さ——継承語教育の大切さ」講師：桶谷仁美氏 2005年3月13日（日）午後1時～3時、トロント日系文化会館のAJCコートにて開催された。

前回の実践的な見地からのバイリンガル教育の必要性を理論的な見地から裏付け、かつ、グループ別ワークショップでは、理想的なバランス・バイリンガルを育てるために、子どもを取り巻く要因を社会的レベル、社会・心理的レベル、心理的レベルと三層の要因、計49項目について検討し、参加者のバイリンガル教育への理解を深める一助となった。続いて、1時間を前回の復習に当て、アンケートの質問から、参加者に参考になるものを抽出し、鈴木美知子が回答にあたった。参加者79名。

2回にわたり、若い父母の参加が多く、時間切れでやむなく閉会したほどの活発な質疑応答に、小さい子どもを持つ父母参加者に求められていた講演会であった事を痛感させられた。アンケートの回収率も良く、今後の活動の参考となる多くの情報が得られた。

② 学校説明会

2005年4月17日（日）午前10時半—12時、トロント日系文化会館のAJCコートにて実施。日本語教育を実施しているトロント周辺の9校が参加し、配布された詳しい資料を参照しつつ、各校代表者の説明を聞き、質疑応答の後、参加者はそれぞれのブースに分かれ、個人的に更に詳しい情報を得ることが出来た。CAJLEとしては、資料記入内容の検討・作成、当日の受付け、代表者説明時間の管理や参加状況のまとめなどが主であった。参加者30名。

3 グループ共催のもとに組織化された説明会実施は初回であり、今後、開催のタイミングなど、検討の余地はあるが、和やかな説明会で成功だった。

(2) 日本語教師研修会

① トロント移住者協会との共催による文法講座——その4

「笑わせて教える日本語」「えっと驚く母音の謎」
講師：金谷武洋氏

2005年2月13日（日）午後1時～4時、トロント日系文化会館のAJCコートにて実施。過去、2003年に2回（4・9月）、2004年に1回（2月）に実施されてきた金谷講師による第4回講座であり、いっものながらユーモアに富み、笑いとおどろきの斬新的な勉強会であった。参加者52名。

② CAJLE オンタリオ部会主催 現場で直ぐに役立つ日本語文法講座

「日本語教師のための考える生きた初級文法とその教え方」講師：谷原公男氏

2005年4月10日（日）午前10時～午後1時、トロント日系文化会館のAJCコートにて開催。文法を教えるということについての一般的な留意点にはじまり、考える生きた文法として、随時ワークショップを盛り込み、参加者の理解を高め、実戦力を養うきめの細かい講義に時のたつのを忘れる3時間であった。参加者27名。

事前に具体的な現場での問題点を調査し講義内容を依頼したことで、参加者の現状に則した研修会を行うことができ、アンケート回答者全員から「大変良かった」という評価を得ることができた。

(3) 調査プロジェクト

高校レベルのクラス担任の教師が、生徒から相談を受けた事に端を発し、日本語学校の従来の継承語学習形態を保持しつつ高校クレジットが取得できるクレジットプログラム Prior Learning Assessment and Recognition (PLAR) がオンタリオ州において、すでに実施されているとの情報を得たので、日本語教育にも導入できるか、どう導入すれば良いかなど調査検討に着手した。

担当者が2月9日にハミルトン教育委員会、2月

16日にトロント教育委員会で行なわれた PLAR チャレンジ・オリエンテーションに参加し、そのプロセスの概略を把握した。PLAR にチャレンジしてクレジット取得を希望する学習者は、年に1度、教育委員会で実施するオリエンテーションに参加した後、デー・スクールからその申し込みパッケージ用紙を受け取る。約6週間でデー・スクール以外での学習内容を査定してもらうための書類を揃えて申し込み書と一緒に学校に提出しなければならない。査定の後テストがあるが、学習内容は、オンタリオ州のガイドラインに沿ったカリキュラムの内容に適合しているかどうか審査される。

そこで、トロント国際交流基金で、4月2日に行われた宇田川洋子先生の“Professional Development Workshop for Teachers of Japanese Strategies for Developing Units, Lessons and Activities”に参加した際、交流基金の斉藤典子氏と宇田川先生の許可を得て、PLAR に関するご案内の後、参加者にアンケートを配った。また、4月10日の「日本語文法講座」で谷原先生の許可を得て、ご案内とアンケートを配った。アンケートの結果として、PLAR について知っていた参加者は、4月2日：1名、4月10日：0名(CAJLE 担当者2名は含まない)、また PLAR に関する説明会を希望については、4月2日、10日共に、大多数の希望者の回答を得た。

今後の活動予定

1) 4月10日の文法講座のアンケート回答者全員が文法講座の継続を希望しているので、できれば、十分に時間を取った2回にわたる連続集中文法講座を実現したい。

2) 3機関の提携は日本語継承語教育啓蒙を推進するために理想的な形態の実現となったので、今年度の活動を3機関合同で反省検討し、提携をより充実させつつ日本語継承語教育の啓蒙を推進したい。今後も継承語教育の講演会を2回予定している。

3) PLAR チャレンジプロジェクト調査の推進
今後は、交流基金の斉藤氏と情報交換して共同で説明会を開く方向に押し進めて日本語教師及び日本語学習者に広く情報を伝え、多くの日本語学習者が PLAR にチャレンジして高校クレジットの取得を得られるように推進したい。PLAR に関するお問い合わせ：清水道子 Tel: 416-695-8153 Email: homi.shim@3web.net

これからの活動案内

2005 年度年次大会

2005 年度年次大会は、8月19日より22日まで、ブリティッシュ・コロンビア州ビクトリアのビクトリア大学を会場に開催いたします。(詳しくは、本号の2005 年度年次大会準備経過報告、CAJLE2005 のご案内、および同封の案内をご参照ください。)

年次総会

年次大会2日目(8月20日)午後5時(仮)より、David Strong Building Auditorium にて年次総会を予定しています。多数のご参加をお待ちしています。詳細は、同封の「年次総会ご案内」をご参照ください。

ようこそ、新しい CAJLE ホームページへ

<http://www.cajle.org>

CAJLE ホームページは、今年の5月から装いを新たにしました。

いまから約5年前、CAJLE 理事会の決定により会のホームページが企画され、鶴沢梢先生がウェブマスターとしてご尽力くださり、2001年の末に開設されました。新しい CAJLE ホームページはこれまでのものを引き継ぎ、年次大会のお知らせやニュ

ースレターなどの出版物の収録をはじめ、各方面にわたる CAJLE の活動情報を提供し、記録するという役目を果たしてまいります。

それと同時に、CAJLE ホームページでは、会員同士の交流の場としての役割を担っていこうと考えております。そのためにいくつかの新しい項目を設けました。たとえば「会員サイト」では、会員の方々が運営しているホームページ、会員の執筆や研究の活動を取り上げているサイトを紹介してみたいと思います。「地域紹介」では、写真などを交えたそれぞれの地域の様子を載せる予定です。今後、

皆さまからのご意見やご参加により、さらに充実したものにしていきたいと思っておりますので、ご投稿、そして関連する情報のご提供など、振るってお寄せくださるのを心待ちにしております。

なお、現在の CAJLE ホームページのデザインやアドレスの取得などの作業には、中尾良子氏、リュウ・ジェーン氏も参加されました。また、現在のサイトはカルガリー大学のサーバーを使用していますが、無償での使用許可を与えてくださった関係者に、併せて感謝を表したいと思っております。（西島、楊）

年次大会

2005 年度年次大会 (CAJLE2005) のご案内

CAJLE2005 大会委員長 野呂 博子

我らが CAJLE 年次大会が初めて、カナダ最西端のブリティッシュ・コロンビア州州都、ビクトリアで開催されます。今回はカナダにおける日本語教師会の草分けである BC 州日本語教育振興会のご協賛を得ることができ、8月19日(金)から21日(日)までの3日間、ビクトリア大学を会場として行います。そして、大会準備委員会では、8月22日(月)に、世界に名だたる Butchart Gardens をはじめ、ビクトリア市内の観光も計画しています。研修会とはちがった雰囲気の中かで参加者同士の交流がはかれると思っております。

バンクーバーにカナダで初めて日系子女のための日本語学校が建設されて、来年でちょうど100年を迎えます。100年の間にさまざまな紆余曲折を経て、日本語教育の形態や目的も変化を遂げました。最近では、学習者の多様化により、日本語教育のあ

り方が継承語教育か外国語教育かというように簡単に分類ができなくなっているのが現状です。CAJLE2005 では「岐路に立つ日本語教育」というテーマを中心に、カナダの日本語教育を歴史的に振り返り、また未来を探りたいと考えています。今大会では以上のテーマのもとに、基調講演、パネルセッションを企画しています。また、従来通り「研究論文発表」、「日本語教師のための研修会およびワークショップ」、「教材展示・販売」(予定)、「情報交換会」、「親睦交流会」なども計画しています。さらに、非母語話者の日本語教師が参加できるよう、英語による研究論文発表、また研修会も行い、母語話者の日本語教師とともに研修を受けることにより、お互いの交流の場となるよう、はかりたいと願っております。BC州はカナダ国内でいち早く日本語教育を公教育に取り入れた州であり、非母語話者

の日本語教師数も多いので、彼等の参加を大いに期待しています。

CAJLEは1988年の発足以来、さまざまな活動を行ってきましたが、その中でもこの年次大会は活動の最大の柱となっています。カナダ各地、またカナダ国外に広がる会員が集まり、直接的な交流が出来る一年に一度の機会です。さらに、研究論文発表会を通じ、新会員が増え、当振興会が活性化する非常に重要な場となっています。参加者は研究論文発表会を通じ、お互いに学術的な刺激を与え合い、日本語教育の現状や展望について意見交換ができます。また、日本語教育に携わっている者にとって、教師としての質の向上は重要課題ですが、研修会、ワークショップを通して、知識や技能の向上をはかることは日本語教育全体の発展に欠かせないことと言えます。2003年度のカルガリー大会に次いで、トロント以外の地で大会を開催するというのはCAJLEの今後の方針にも関わっています。つまり、大会の開催地を各地に移動させるという方向により、さらに教師間のネットワークが広がり、その地域における日本語教育の現状に沿った内容を取り入れることができると確信しております。

<大会のハイライト>

基調講演

BC州日本語教育振興会およびバンクーバー日本語学校校長、本間真理氏に戦前・戦後を通じ、カナダにおける日本語教育に深く関わったバンクーバー日本語学校の変遷とBC州日本語教育振興会の歩みについてお話しいただきます。

研究発表・パネル発表

今年もカナダ、アメリカ、日本、韓国などカナダ国内外からの発表者が予定されています。今回は新たにパネルセッションも企画されています。一例を挙げると「日本語教育における演劇的アプローチ：話し言葉の獲得」のテーマのもとに、日本語教育に携わる日本とカナダからのパネリストが演劇専門研究者と日本語教育における演劇・ドラマの持つ可

能性を話し合います。また、BC州日本語教育振興会のメンバーによる、継承語としての日本語教育のパネルセッションも企画されています。「岐路に立つ日本語教育」という大会のメインテーマにふさわしく、日本語教育をさまざまな角度から検討することになるでしょう。

日本語教師研修会

今回は日本とカナダから6名の講師をお迎えし、さまざまな切り口から日本語教育に関わる研修を担当していただきます。

簡単に各講師の方をご紹介します。

・柳澤好昭先生(国立国語研究所日本語教育部門第二領域長)

長年日本語教師教育に携わっていらっしゃいます。日本語教育におけるIT利用や教師間教育情報科学ネットワーク等、アイデア満載の方です。最近ではコミュニケーションストラテジーなど、広い視点から日本語教育への提言をなさっています。刺激的な研修内容をお楽しみに。

・川口義一先生(早稲田大学)

CAJLEではおなじみの、多彩で多才な川口先生です。学習者の立場になって日本語を教えるという教育哲学をお持ちで、学習者のいろいろな母語をマスターしていらっしゃるのには、敬服。今年も楽しくて役に立つご講義をしてくださると、当方保証いたします。

・王伸子先生(専修大学)

日本語音声、日本語口頭表現、一般日本事情など、幅広く日本語教育に関わっていらっしゃいます。著書多数、また日中交流に関する会議やシンポジウムではパネリストとして欠かせない方です。とてもわかりやすく楽しい講義をなさいます。

・金谷武洋先生(モントリオール大学)「盆栽文法」でおなじみ。ご専門は構文論と言語類型論で、「日本語に主語はいらない」(2002)「日本語文法の謎を解く」(2003)「英語にも主語はなかった」(2004)など、一般読者にも楽しめて目からうろこの日本語文

法論を展開していらっしゃいます。

・宇田川洋子先生（国際交流基金派遣アルバータ教育省）

アルバータ教育省にいらっしゃる前は、オーストラリアのヴィクトリア州教育省で日本語アドバイザーとして、またその前は中国とインドネシアで客員教授、ニュージーランドで日本語アドバイザーを務められ、日本語教育について幅広い豊かな経験を持っていらっしゃいます。一昨年、昨年の CAJLE 年次大会に引き続き、今年も英語による教師研修をお願いいたします。

・原田哲夫先生（早稲田大学）

長年、アメリカで日本語教育に関わっていらっしゃいましたが、今年から早稲田大学に移られました。ご専門は応用言語学、第二言語習得でいらっしゃいます。

ビクトリア観光ツアー

世界に名だたる ブッチャートガーデン (Butchart Gardens) をたずね、色とりどりの花が咲き乱れる庭をゆっくり散策していただきます。昼食後、お腹がいっぱいになったところで、近くのワイナリー見学をします。ここではワインテースティ

ング付きです。海沿いの Scenic Drive を楽しんだ後は、ダウンタウンで解散とします。英国植民地時代の面影を色濃く残すビクトリアは、アフタヌーンティーやガーデニングなど、生活習慣にも英国の香りが漂っています。春から夏のシーズンには、街中が色とりどりの花で彩られ、観光客が大勢押し寄せます。おしゃれなレストランやカフェ、アンティーク街、スーベニアショップ巡りなど、楽しみがいっぱいです。またBC州博物館の見学もお忘れなく。BC州のネイティブ文化に触れることができます。

ビクトリア大学近辺の散歩

会場となるビクトリア大学は自然がいっぱいです。10分も歩けば、海浜公園があり、大学内にはガーデナー必見の Finnerty Garden もあります。キャンパスには野うさぎの姿も多く見られます。大学のはずれにある森にはクーガーもいるとかいいたか。

<最後に一言>

四季折々のよさがあるビクトリアですが、夏が一番。ビクトリア人も夏はどこへも行かないほどです。避暑と観光も兼ねて是非、CAJLE2005 へご参加ください。

日英の翻訳は20年の実績を持つ JCにおまかせください

- * 翻訳、通訳サービス（日英、英日）
- * 日英の名刺作成
- * 日英の DTP、印刷物、パワーポイント
- * 卒業証明書、戸籍抄本などの翻訳証明書付き翻訳
- * Web ページのデザイン、ローカライゼーション（日英）

日英、英日の翻訳者を募集しています。

Tel: 416.593.6118 Fax: 416.593.1871 shin@jpncom.com



JAPAN COMMUNICATIONS INC.
ジャパン・コミュニケーションズ

555 Richmond Street West, Suite 705, Box 500
www.jpncom.com Toronto, ON M5V 3B1

特別寄稿

カナダ日本語教育事情西東

宇田川 洋子（アルバータ教育省）

こんにちは！国際交流基金からアルバータ州に派遣されている宇田川です。早いもので、着任して2年近くが過ぎようとしています。今回は楊先生から、私の出張経験などをもとにカナダの日本語教育について東西事情を中心に書いてほしいとの依頼をいただきました。

私の業務は二つあります。アルバータ教育省の日本語アドバイザーとしての仕事と、国際交流基金の日本語教育専門家としてカナダの日本語教育機関への支援をすることです。後者の役割として、カナダ各地に出張し、日本語教育関係者からお話を聞いたり、行事に参加したりしているわけですが、何しろ広い国ですので、なかなか全部を回りきれません。着任初年度は、まず日本語学習者数の多いバンクーバー、トロントなどから始め、その後、アルバータ州とともに Western and Northern Canadian Protocol に加盟しているマニトバ州、サスカチュワン州、さらに、コンフェレンスや弁論大会などの行われる場所などに出張しています。

2005年に入って、二つの地域におじゃますることができました。一つはブリティッシュ・コロンビア州のロッキー山脈沿いにあるカムループスとケローナの地域で、もう一つはカナダ東部、ニューブランズウィック州とノバスコシア州です。どちらの地域も、日本語のアドバイザーが行くのは、前任者も連れて初めてでした。

カムループスでは、トンプソン・リバーズ大学（前 University College of the Cariboo）のほかに、地域に五つある高校のうち四つまでが日本語を教えています。また、日系センターも歴史が長く、日本語教室もあ

ります。

カナダ東部のほうは、ニューブランズウィック州フレデリクトンにあるニューブランズウィック大学とセント・トーマス大学、サックビルにあるマウント・アリソン大学、そしてノバスコシア州ではハリファクスにあるセント・メアリーズ大学を回りました。マウント・アリソン大学では授業にも参加させていただき、学生さんたちと会話練習を通して、いろいろな意見を聞くことができました。私も、日本やインドネシアの大学で日本語を教えました、やはり、自分のクラスを持つのは楽しいという思いを新たにしました。特に中級は、ずいぶんバラエティーに富んだ会話ができるようになり、これこそ外国語教師の醍醐味という感じです。

さて、こうしてカナダ各地の日本語事情を見てきますと、東西だけではなく、いろいろな切り口の比較ができることがわかります。同じ州でも、バンクーバーとカムループスでは大学の規模やアジア系学生の割合など、事情がかなり違います。反対に、西のバンクーバーと東のトロントに共通した点もあります。

まず、違いのほうから気がついたことを挙げてみましょう。

初等中等教育レベルの第二言語教育政策では、東西の違いがはっきりしています。ご存知のように、ケベック州を除いて、オンタリオから東の諸州では、小学校から高校までのある一定の年数、フランス語が必修になります。一方、西のブリティッシュ・コロンビア州では、第二言語が小学校5年生から必修ですが、フランス語だけでなく、さまざまな言語が

第二言語として教えられています。アルバータ州も、来年から4年生から9年生までの学年で第二言語が必修になります。ブリティッシュ・コロンビア州同様、マルチリンガル教育を目指しています。マニトバ州、サスカチュワン州も、基本的政策はアルバータ州と同じです。

このことが、日本語教育機関調査の数にも表れています。ブリティッシュ・コロンビア州やアルバータ州など西部では、初等中等教育段階での日本語学習者数が大きな割合を占めるのに対し、カナダ東部の各州では、大学や日本語学校などの教育機関の学習者数の割合が大きくなります。

学生についてみると、大学でも、高校でも、漢字のバックグラウンドがあるアジア系の学生が多数を占めるところと、非漢字系の言語を第一言語とする学生がほとんどというところに大きく分かれるような気がします。前者は、マルチカルチャー度の高い大都市で、このような傾向が顕著に見られます。バンクーバー、トロントなどがその典型的な例です。これは、東西に関わらず、その地域の住民の民族的背景や、留学生の割合などが影響していると言えます。

それから、教育機関の規模もあります。全学生数が比較的少ない大学の場合、日本語や日本研究、あるいはいろいろな言語の先生方、留学生センターの方、学科長、学部長などの間のコミュニケーションが非常にいいという印象を受けました。今年出張した、トンプソン・リバーズ大学、ニューブランズウィック大学、マウント・アリソン大学、セント・メアリーズ大学のいずれも、皆さん和気藹々というムードで協力体制が整っているなあという印象を受けました。

カナダ全体に見られる共通点もいくつかあります。

全国の学生たちと話したり、弁論大会の審査をしたりして思うことは、日本のメディアとテクノロジーの人気の高さです。世界的傾向と言えるかもしれませんが、ほとんどの学生が、日本のアニメかコン

ピュータゲームの大ファンであることが、日本語の学習の動機だと言っています。最近の教授法では、学習者のニーズや興味を重視し活用した授業が、個々の能力の発達促進につながるとしています。ですから、この学生たちのエネルギーを、ぜひ日本語教育、日本研究の振興に役立てましょう。具体的な例を挙げれば、カルガリー大学で行われている日本語アニメフェスティバル **Otafest** は、三百キロ離れたエドモントンからバスを仕立てて参加する高校もあるそうで、大学のいい宣伝にもなり、学習者への刺激にもなっているそうです。

もう一つ、共通点として思うのは、カナダの教育機関におけるテクノロジー導入度の高さです。カナダは今までも、世界的に使われている教育ソフトを送り出してきました。**WebCT** や **Hot Potato** がその例です。これらを活用した日本語コースもあちこちで見られます。また、以前よりぐっと質のよくなった音声や映像を利用したデジタル教材や試験作成なども進められています。日本語教育でも、例えば、ヨーク大学とセント・メアリーズ大学間のビデオコンフェレンス授業など、機関や州を超えて、テクノロジーを活用した授業が始まりつつあります。

もう一つ、ヘリテージ校とか日本語学校と呼ばれるところでお聞きしたことにも触れておきたいと思います。カナダの各地にある日本語学校を回ってみると、多くの機関で、家庭で日本語を使わない生徒の急増が見られます。つまり、このような教育機関での、第二言語としての日本語教育が課題になっているといえるでしょう。

ちょっと残念だと思うことは、大学と初等中等教育機関のネットワーク形成が積極的に進められているところが少ないことです。高校で日本語を勉強した生徒が必ずしも大学に行って日本語を勉強するとは限りませんが、日系センターなども含めて日本に関係するいろいろな機関との協力体制を作っていくことは、地域の日本語教育全体の発展に結びつくと思います。また、アルバータ州の例を出してしまい

ますが、最近アルバータ大学やカルガリー大学では、教育省との共催で、小中高校の先生方のための教師研修を開催しており、いつもかなりの参加者があります。大学にとって新たなマーケットであるだけでなく、Education Board など地域の教育関係者に対する宣伝にもなると思います。

こんなところでしょうか。なんとなくまとまりのない話になってしまいました。それに、今回の内容は、いずれも出張の経験をもとにした感想であり、カナダ全部の機関を網羅した調査報告ではありません。ですから、「私のところでも同じようなことをやっているのに」とか「ちょっと違うなあ」と感じている方もあると思います。何かご意見、情報、要望などありましたら、ぜひご連絡ください。また、先生方のミーティングなどが行われる場合にも、ぜひお知らせください。できる限りお役に立ちたいと思っています。

宇田川のメールアドレス：

yoko.udagawa@gov.ab.ca

最後にお礼を申し上げたいと思います。出張の際

には、いつもそれぞれの地域の先生方に本当にお世話になっています。みなさんお忙しいのに、申し訳ありません。最近の例を挙げさせていただければ、すばらしい和室のあるお宅に泊めてくださったCAJLE 前会長の西島先生（ベティちゃんたちにもよろしく！）、いろいろ企画してくださった大江先生、朝に夜に送迎してくださった王先生、本当にありがとうございました。それから、弁論大会の賞品や教材の購入のことでいつもお騒がせしているトロントの「にほんごサークル」のみなさま、これからもよろしく願いいたします。そして、常に強力なカルガリー軍団を率いて、教師研修にネットワーク作りにと尽力し、私のこの原稿作成にもいろいろ助言をくださった楊先生、いつも本当にありがとうございます。

そうそう、私の任期が延長になり、2006年6月までカナダの日本語アドバイザーを勤めさせていただくことになりました。どうぞ、今年度もよろしく願いいたします。

Nihongo Circle : Specializing in Japanese Imports
カナダの日本語教育をお手伝いします。



教科書の買付け、お任せください。

為替の換算から残本の始末まで。ご自分でやれば大変な手間です。面倒なことはプロに任せて「先生方は、授業と研究に時間を使うべきだ」とNihongo Circleは考えます。Nihongo Circleでは、1) US\$, CAN\$建てどちらもOK、2) 残本の翌年回しOK、3) デスクコピーについてもご相談ください。4) 「ご用ききサービス」もいたします。まずはご相談を。

予約受付中！ —今秋出版予定—

金谷武洋著「評伝三上章：象の鼻と鶴の羽」（仮題）

お問い合わせは、Nihongo Circle Toronto Office

ysugi@sympatico.ca: 1-416-961-5510

又は、Nihongo Circle Waterloo Office

nihongoc@rogers.com

初めて「先生」と呼ばれて

鈴木 崇夫（名古屋外国語大学）

私は名古屋外国語大学大学院国際コミュニケーション研究科博士前期課程日本語専攻に在学中の鈴木崇夫といます。名古屋生まれ、名古屋育ちの私は、小さい頃から「国語」の先生になることが夢でした。そして、人生の1つの大きな山場である大学受験を迎え、その時に出会ったのが、当時新設学科として取り上げられていた名古屋外国語大学外国語学部日本語学科でした。外国語学部日本語学科？なぜ日本語なのに外国語学部なのだろう。その疑問から資料を取り寄せ色々調べてみました。その資料に写っていた現学長の水谷修先生、それからカッケンブッシュ知念寛子先生、さらにCAJLEではお馴染みの曾我松男先生の写真は忘れられません。その資料によると、グローバルな視点で見れば、日本語も世界の中の1つの外国語だということです。そんなことはそれまで考えてもみませんでした。中学校から理由もわからず英語を勉強させられ、それ以外の外国語を選択する余地がなかったわけで、私には外国語を目的を持って学習するという概念自体がなかったのです。ですから、英語以外の外国語のことなんて考えたこともありませんでした。

その日本語学科では、日本語教師養成の科目以外に、日本語運用力（口頭表現・文章表現・ディベート力など）養成を目的としたカリキュラムが組み込まれていました。入学志望時点では日本語教師というよりも、国語科教員を目指すため、自分の日本語力を高めることが目的だったというのが本当のところでした。気づいてみると、教育大学の国語科教員養成課程などを受験するのをやめて、この日本語学科を志望し受験していました。そして晴れて合格、新設日本語学科の1期生になれたのです。

入学当初、私は日本語教育に関する知識など何もなくて、ゼロからのスタートでした。それまで日本語

を意識して考えたことなど一度もなかったわけですが、県外から来た学生の方言やイントネーションなどに触れ、名古屋から外に出たことのなかった私にとってはカルチャーショック同然でした。まずは標準語のアクセントとイントネーションを知ることから自分の日本語を意識化していきました。

その傍ら、私は教職課程を履修し教員免許状の取得にも努めました。名古屋外国語大学日本語学科では第二外国語を履修する代わりに第一外国語である英語へのウェイトが大きく置かれています。それは、日本語を英語と照らし合わせて見るためのツールとして使えるようになることを目的としていて、教職課程履修者には国語科免許状と合わせて英語科免許状も取得出来るようになっていました。

学年を重ねるにつれ、国語科教員になりたい気持ちと、日本語教師になりたい気持ちが半々になっていきました。大学4年の時に地元の中学校で教育実習をした時は国語を担当しました。しかしその際、担当の先生から任されたのは、「言葉の研究室」という項目の中の「日本語の音と文字」という単元でした。そこでは日本語のアクセントなどが取り上げられていて、まるで自分が大学1年の時に味わった日本語カルチャーショックを中学生に教えているようでした。その時、私の中で日本語教師になりたいという気持ちが国語科教員になりたいという気持ちを超えました。国際交流の最前線に立ち日本語教師として日本語を教えることは、日本という国を世界に発信していくことであり、自分にとっても学ぶことがたくさんあると思ったからです。それに将来、もし国語科教員の夢をあきらめきれず、日本語教師を経験したあとで国語科教員になったとしたら、もっとたくさんのお話を日本の子供達に還元してあげられるだろう、と考えたからです。

そして、さらに日本語教育の分野を究めるため同大学大学院へ進学して、1年を終えたところでカナダへ留学しました。名古屋外国語大学には CAJLE 初代会長の中島和子先生もいらっしゃいます。「カナダは語学教育の宝庫」という先生のお言葉から、英語科教員免許を持っている自分の英語力を磨き、同時に語学教育の宝庫カナダで日本語教育の現場をみるのができればと、カナダを選びました。

約5ヶ月間はカルガリーで ESL の学校に通い、CAJLE の年次大会を機にトロントへ移動しました。その際、同じ宿に宿泊されていたのがカルガリー大学のサマレル史子先生とライリー洋子先生です。数限りなくある宿の中で、まさか同じカルガリーから来ている先生が同じ宿に宿泊しているなんて起こり得るのか?! と思いましたが、それが私にとっての運命的な出会いになりました。楊暁捷先生を含めた3人の先生方から残りの期間をカルガリー大学でボランティア・アシスタントとして日本語のクラスを手伝わせていただけというお話をいただき、カルガリーへ戻ることを決めました。もちろん CAJLE の大会でたくさん勉強になったことはありましたが、カルガリー大学の先生方と出会えたことが、私にとっては大きな財産となりました。

日本語教育と出逢ってから6年目にして初めて

日本語教育の現場に立つことが出来たのです。私の場合、日本語学科の1期生であったということもあり、当時は日本語教育実習が整備されておらず、大学学部時代に実習が出来なかったのです。ですから、日本語を教えるというのはこのボランティアが初めての経験でした。ボランティアではありましたが、頼ってくれる学生もたくさんいました。半年間という短い期間はあっという間に過ぎ去り、カルガリー大学の先生方のご好意で、最後には学生を交えた大きなお別れ会を開いてくださいました。会には60人にも及ぶ学生が参加してくれ、英語と習ったばかりの日本語を交えて一生懸命「ありがとう」の気持ちを伝えようとしてくれたのです。そんな学生の姿には感無量で、みんなの前で恥ずかしながら男泣きしてしまいました。最後に学生がくれた寄せ書きや手紙には「先生」という言葉もあり、それが私にとって日本語を教える上で初めて「先生」と呼ばれた瞬間でした。先生方、学生たちとの出会いを含めたカルガリー大学での経験は一生忘れられません。

カルガリーは私にとって第二の故郷になりました。いつかまたあのカルガリーに帰って日本語を教えることが出来る日を夢見ながら、現在、中島和子先生の元で修士論文を書いています。

連載

短歌に詠まれた日本語教育の現場・その二 (全4回)

鵜沢 梢 (レスブリッジ大学)

今回は大口玲子(おおぐち・りょうこ)さんという宮城県で日本語教師をされている方の短歌をご紹介します。大口さんはまだ30歳代の

若い方ですが、すでに歌集を2冊も出版され、第1歌集の『海量(ハイリヤン)』で現代歌人協会賞、第2歌集の『東北』では前川佐美雄賞を受賞した新

進気鋭のスケールの大きい若手歌人です。大口さんは職業柄、日本語学生のことをよく歌に詠んでいるのですが、私の気に入っている短歌がかなりたくさんあります。その中から一つ取りあげてみました。

・ 答へられぬ学生に深く立ち入れば星選ぶやうに助詞選びをり

このようなことは日本語教育に携わる者だったら誰でも経験されたことがあるのではないのでしょうか。日本語母語話者にとってはなんでもない「てにをは」ですが、日本語を外国語として学んでいる学習者にとって何よりも難しいのが助詞の使い方です。「は」を使うべきか、「が」を使うべきか、それが問題じゃ、といったところでしょうか。助詞の数なんてそんなにたくさんあるわけではないのに、学習者にとっては、それが星の数ほどもあるように思えるのでしょうか。正しい助詞を使おうと思って、ぐっと詰まってしまった学生、そんな学生を見ていると教師としても切なくなってきましたね。

大口さんのこの短歌では「助詞」という、歌の世界ではめったに使われない言葉が重要な言葉になっていると思います。「助詞」という具体的な言葉が使っているため、この歌の中の学生は日本語を習っている学生だということが分かります。そして「星選ぶやうに」という表現で、さらにこの学生の日本語のレベルまでなんとなく分かかってしまう気がします。日本語教師の経験したある日のある一瞬を精巧なカメラでとらえたような一首です。しかも、カメラでは捕えきれない心の内部まで捕えています。

こんな短歌を英訳するのは本当に難しいのですが、1年前からオーストラリア在住のアメリカ・フィールデンさんという方と現代短歌英訳のプロジェクトを進めてきました。俳句に比べると短歌はまだまだ英語圏の人々に知られていないのを残念に思い、なんとか現代短歌の素晴らしさを世界の人々に知ってもらいたいと思っていたところに、アメリ

アさんと出会ったのがきっかけです。アメリカさんは詩人ですが、日本に留学し、オーストラリアの高校で日本語を教えていたこともある方です。短歌にも造詣が深く、河野裕子の短歌の研究で修士論文を書いています。以前「NHK 歌壇」というテレビ番組にゲスト出演されたこともあり、辞書を引きながらですが、かなり日本語の短歌も読めるのでびっくりしました。アメリカさんとは、ある英語短歌の雑誌誌上でたびたび出会い、その後メールのやり取りを通して、交流を深めてきました。（実を言うと、私は日本語で短歌を作るだけではあきたらずに、英語でもタンカを書いています。）この原稿を書いている時点（4月）ではまだ実際にアメリカさんにお会いしていないのですが、6月にシカゴで開かれる日英語翻訳者会議でジョイントプレゼンテーションをすることになっており、そのときに初めて実際に会ってお話しできる予定です。

最初のプロジェクトは現代短歌 101 首の英訳で、その中に、大口さんの上記の歌も入れました。英訳は下記のようなものです。なお、この現代短歌 101 首の英訳はアメリカの出版社が興味を示してくれ、現在、出版の検討がなされているところですが、うまく出版されるといいなと思っています。

probing further

I find the student

unable to answer

is looking for a word

as if looking for a star

この英訳では肝心の「助詞」は、残念ながら、うまく訳出することができませんでした。「助詞」は英語圏の大学等では"particle"と呼ばれているのですが、"particle"では、日本語を習ったことがない人にはなんのことか分からないだろうと考えて"word"にせざるをえませんでした。「助詞」に比べると"word"はシャープさに欠けるし、この歌に詠まれている学

生が日本語を習っている学生かどうかは、はっきり分からなくなります。「助詞」という言葉は日本の社会の中では普遍的に使われており、大抵の人が理解できる言葉です。しかし"particle"は、日本語教育の中で「助詞」あるいは「てにをは」の意味に使われている特殊な用語です。この英訳の中に"particle"を使ったら、これは一般の人には理解できない詩になってしまいます。

日本語の定型詩を英語に訳すのは、言葉の数が制限されているだけに、1語にかかる比重が大きくなり、言葉を選ぶのに苦労します。しかも詩ですから、リズムとか音とかイメージとかも考慮しなければなりません。何度も何度も推敲を繰り返してようやく出来上がるわけですが、この大口さんの歌の英訳は、それでも原作の持っている美しさを表現できたのではないかと思います。

ところで、前回のエッセイで助詞が会話の中ではよく省かれることを書きましたが、短歌の中でもよく省かれます。これは、リズムを整えるため、というのが主な目的です。字余りになると、リズムが崩れてしまうため、助詞は省いても意味が通じる場合は省いてしまいます。大口さんの短歌では「星選ぶ」「助詞選ぶ」の中で、「を」が省かれています。「星を選びをり」「助詞を選びをり」ではリズムが大幅に崩れてしまいます。しかし「学生に」の「に」は省くことが出来ません。意味があいまいになってしまうためです。

「日本語のシラブルの特徴を教えるために日本語を習っている学生に短歌を教えるといい」という

研究発表を CAJLE の年次大会で聞いたことがあります。短歌は5-7-5-7-7という音のくぎりとながりを持つ定型詩であるため、促音、拗音、長音等の数え方の訓練をすると、発音を教えるのにちょうどいいのだと思います。それと同時に、私は短歌を教えることによって助詞の省き方の訓練も出来るのではないかと考えています。省いても意味が通じるものと、省くと意味があいまいになってしまうものの区別がいたら、学生にとっても負担が少なくなるのではないかと思います。省いてもあまり意味が変わらない助詞をあれこれと探して会話が途切れてしまつては、学生も教師もやりきれなくなります。

しかしながら、助詞を省くと意味が変わったり、あいまいになったりする例はもちろん、たくさんあります。

- (1) ここでかいてください。
- (2) ここにかいてください。
- (3) ここ、かいてください。

上記の例ですと、「で」「に」「ゼロ助詞」かによって意味違ってきます。助詞が省かれた(3)の例では、意味は「かゆいところをかいてくれ」と頼んでいる意味にもとれますね。このような例をおさえて教えていけば、意味があまり変わらない助詞は省いてしまえるので、会話の最中にあれこれといわゆる「正しい」助詞を探して会話を途切らせてしまうというようなことはなくなるのではないかと思います。いかがでしょうか。

リメディアル教育 ——嗚呼！日本人学生の知識と学力

王 伸子（専修大学）

カナダでの1年間の生活が終わり、今、初夏のような東京で再びこの原稿を書いています。日本語教育にたずさわる者として、海外での1年間はたいへん貴重な時間でした。大学での研究だけではなく、子どもを帯同したため小学校、中学校の様子や教育内容なども知ることができました。けれども、帰国して大学での授業が始まってから、もっと重大なことに気づきました。なんと、日本を留守にした1年の間に、聞いたこともない日本語が目白押し・・・！！

カナダ滞在中も、翌年の日本への復帰に備えて毎日インターネットでニュースや流行、テレビ番組等を網羅的にチェックしていましたし、そうした中から教材等に使えるものを蓄えていたつもり、だったのですが、やはりその場で生活していないと取りこぼしていることがたくさんありました。

こりゃ大変！と思ったのは、上級日本語という2～4年次の学生の授業で、ふと、見たこともない単語を目にして、「これ、なんだろう・・・」とつぶやいたところ、「昨年あたりからよく使われるようになったんですけど、〇〇という意味なんですよ」と、留学生に教わるという一幕があつてからです。それからは『**imidas**』（集英社）や「**Wikipedia**」（インターネット・フリー百科事典）など、最近の出来事等を最近のことばで解説するものにちよくちよく目を通すようにしています。これらは、今の日本を知り、新しい語彙を増やす上で役に立ちますので、ぜひネット上で検索しチェックすることをお勧めいたします。

さて、カナダでチェックしていたものの一つに、昨年11月24日の産経新聞の記事があります。「日本語力」低下—4年制私大、国立さえ...「留学生以下」お寒い大学生というものです。日本語に関わる者には見逃せない見出し・・・「留学生以下」とは？留学

生がそんなに低いと評価されていることが、まず気になります。

これは、日本の大学に通う一般学生の日本語力が相対的に下がったとされる中、日本語の語彙とその意味に関するテストを行い、どのくらい得点できるかということ調査したものです。すると、留学生にも劣る語彙力であり、さらに中学生の学力にも及ばない者もいたということなのです。

この記事の中に、**リメディアル教育**ということばが出てきます。これは、本来、すでに理解していなければならない知識が定着しておらず、大学に入学後、あらためて教育しなおすという事柄の内容なのですが、つまり、ここでは、日本語に関してもう一度、大学入学後に基礎から訓練する、という「やり直しの国語」のような意味合いで使われています。日本語のリメディアル教育を行っている大学によると、その教育をおこなった後、学生の理解力、作文力が向上しているという結果が出ていると報告されていました。

4月に大学に戻った私は授業でその記事を使ったのですが、その後、学内の掲示板でリメディアル教育についての掲示を目にしました。それは、リメディアル講座文章力コースと数学力コースというもので、基礎のやり直しを有料で行うと、エクステンションセンター事務課が受講生を募集しているものでした。専修大学のエクステンションセンターとは、単位を出す正規の授業とは別に、希望者に課外講座をおこなう部署で、司法試験受験対策講座、公務員試験講座、会計士講座、**TOEIC TEST** 講座などがあります。それらのコースは本来の授業料とは別に有料でおこなわれますが、一部の講座は公開講座として学外の方の受講も歓迎しています。リメディアル講座もその1つで、案内には「高校までに習った国

語・英語（文章力）と数学の知識を、もう一度勉強し直して確実に身に付け、総合的な学力の向上につながることを目指し、文章やデータを「読む力」（読解力、分析・判断力）、論理的な文章を書く、自分の考えを正しく伝え、相手を説得するといった、「書く力」「話す力」（文章構成力、客観性・説得力）—さらに、これらを総合した、『論理的思考能力』を鍛える」とうたわれていました。

さっそく担当事務課の様子を聞きました。事務課の話では、やはり11月24日の産経新聞での記事以降、相次いでリメディアル教育が注目され、多くの大学で取り入れ始めたようだということでした。もともと日本では、日本語の語彙力から始まったことではなく、高校までの新教育課程カリキュラムのため、生物を学んでいない医科系学生教育や、理工系の物理、数学の基礎学力を補うための教育から考えられるようになったものだということですが、日本語はともかくとして、医学生の場合はかなり深刻なのではないのでしょうか。アメリカでは語学系で発展している教育だということです。

さて、私が持っている1年生の日本語クラスでは、学期の最初に「特別な読み方」と称して、当用漢字付表の漢字の読みを学習させています。100余りあるその読みをほとんどを出しているのですが、例えば、それらには「小豆（あずき）、田舎（いなか）、為替（かわせ）、景色（けしき）、素人（しろうと）、真っ赤（まっか）、真っ青（まっさお）」等々、日本で生活するうえで必要な語彙が多く含まれています。これらの語句には、いわゆる当て字も含まれていて、「慣用の広く久しいもの」と説明されています。とくに、漢字圏の学生には、中国語にはない漢字語であるため、苦手な語句なのです。今年、ある学生がこんなことを言ってきました。

「日本人学生の友達に見せたんですけど、むずかしくて、日本人にも読めない漢字だからできなくてしょうがないって・・・」

え～、誰よ、それ・・・。そのとき、私の頭をよ

ぎった一言は「リメディアル教育」。

確かに、学力低下ということは、近年、大学教員の間でもちよくちよく話題になります。大学が基礎学力の向上にも真剣に取り組まなくてはならない時代になったということでしょうか。これについては、**e-learning** という **web** を用いた個別教育が効果をあげているという情報も報告されており、インターネットによる教育も、同時に注目されています。

さきほどの当用漢字付表の漢字語というのは、全部見ていただければわかりますが、一般の小説などを読んでいけば、必ず出てくるような語句がほとんどで、日本で教育を受け生活している者なら、学校の授業であえて習うような語句ではありません。しかし、ビデオやゲームなどと共に小さい頃から過ごしてきた子どもたちには、そうした語句に触れる機会がほとんど無かったのではないのでしょうか。読書の量が減っているということも大きな要因かと思われます。それを補うためにインターネット等のメディアを使った教育が効果をあげているというのも複雑な気がします。

前回の原稿にも書いたように、私の「一般日本事情」科目は、日本の一般学生が、家庭で学ぶことと学校での学習項目の両方の知識をバランスよく、いわゆる常識として蓄積している成人であると仮定して、それを到達目標に置き授業を展開しています。それが私の考える「日本事情」のカリキュラムです。

しかし、そうした基礎学力や常識すらこころもたない学生が増えている現状を目の当たりにすると、一般的な日本の学生の知識を視野に入れた「一般日本事情」の内容も、考え直さないといけないのかもしれない。

その一方、現在、2～4年次の留学生を対象とした選択科目「日本語上級理解」では、日本政府の各省庁が出している『白書』『青書』を取り上げ、より高度な経済、法律等の記事や専門書を読むための日本語に取り組んでいます。留学生の学ぶ専門的内容から言えば、以前は商学、経営学を学ぼうと入学し

てくる留学生が圧倒的に多かったのですが、日本語学・日本語教育を学ぶ学科が整備されたり、法科大学院の設置などから法学部の目指すものに変化が出てきたことなども影響し、現在、文学部や法学部に入学を希望する留学生も増えてきたようです。私たち日本語科目担当教員も、そうしたことに合わせて、

教える内容の再検討をしていく時期かもしれません。

ともあれ、留学生のやる気はまだまだ捨てたものではありません。「留学生以下の学力」ではなく、「目指せ！留学生の学力」などと言われる日が来ってしまうかもしれません・・・なんて、期待しすぎでしょうか・・・。

地域便り

アトランティック部会発足に寄せて

大江 都 (マウント・アリソン大学)

2005年3月、理事会の承認を経て「CAJLEアトランティック部会」が発足いたしました。立ち上げ当初のメンバーは三名という、たいへん少人数でのスタートではありますが、将来に向け、意味ある会に発展させていきたいと願っています。

まず、この新しい部会の設定されたアトランティック・カナダが、どんな所であるかを会員の皆さまに知っていただくために、当地域の背景、日本語教育事情を紹介させていただきたいと思います。

アトランティック・カナダは、その名が示すように、大西洋岸に面したニューファンドランド・ラブラドール (NL) 州、ノバスコシア (NS) 州、プリンス・エドワード島 (PEI) 州、ニューブランズウィック (NB) 州の四州から成っています。広大な面積に比べ、人口は四州合わせてもトロント市の半分の約240万人という少なさで、人口過疎の地域です。しかしながら、アトランティック地域はカナダ史の上では大事な地であります。17世紀にヨーロッパ人がカナダで最初に入植したのは、ニューファンドランド州とノバスコシア州であり、1864年にカナダ連邦政府成立に向けて初めて会議が開かれたの

は、プリンス・エドワード島のシャーロットタウンでした。その一方、経済発展においては他州から一歩立ち遅れ、天然資源に依存した第一次産業を主要とするため、失業率も高いことで知られてきました。しかし、近年、オフショアのハイバーニア油田の開発、ニューブランズウィック州の通信技術の先駆的開発など、変化の兆しが見られ、今後の発展が期待できる過渡期にあると見ることもできません。

地球半周離れた日本との関係はどうかというと、意外にも密接で、隣国アメリカに次いで、日本は水産物、パルプ、農産物等の大事な輸出相手国になっています。プリンス・エドワード島の「赤毛のアン」を訪れる日本人観光客の数が、ひと夏で二万人以上に及ぶということからも、日本との友好が大事であることは明らかです。

こうした日本への強い関心を背景に、アトランティック・カナダ四州には現在、日本語講座を持つ大学が以下のとおり六校あります。

NL州：メモリアル大学 (2レベル、教師1名)、

PEI 州：プリンス・エドワード島大学（初級、
教師 1 名）
NS 州：セント・メアリーズ大学（初級、中級、
教師 2 名）
NB 州：ニューブランズウィック大学（初級、中級、
教師 1 名）
セント・トーマス大学（初級、教師 1 名）
マウント・アリソン大学（初級、中級、
教師 1 名）、
アトランティック・バプテスト大学
（初級、教師 1 名、2005 年度開講予定）
（メモリアル大学、プリンス・エドワード島大学に
ついては、CAJLE ニュースレター 24 号（2002 年 5
月）を参照、また、マウント・アリソン大学につ
いては、ニュースレター本号の「学校めぐり」を参照
ください。）

1998 年に、四州合同のアトランティック・カナ
ダ日本語弁論大会が初めて開かれ、以来弁論大会は、
カナダの他地域同様年中行事となり、今年で 7 回目

を迎えました。年に一回のこの行事は、学生たちが
日本語能力を競う場であると同時に、参加校の先生
たちの楽しい交流の場ともなりました。しかし残念
ながら、開催地が遠く日帰りができない、日本語コ
ースが隔年にしか開講されない、教師が毎年変わっ
て引き継ぎができない等々の理由から、この弁論大
会に参加できない大学もあります。また、これまで
のところ、大学間、教師間における定着したネット
ワーク活動はなく、CAJLE の会員も増えないまま、
現在に至っているのが状況です。

さて、以上のような背景の中で、「アトランティ
ック部会」を今後どのように発展させていくか、こ
れは大きな課題なのですが、当面は、会員募集をす
るよりもまずは勉強会や情報交換などの活動を提
供し、CAJLE の会員、非会員を問わず、参加を呼び
かけていこうということで意見が一致いたしました。
具体的な活動内容は現在検討中ですが、活動を
開始した際には、皆様からの意見、アドバイスを受
けながら、進めたいと考える次第です。今後とも、
よろしくご支援のほど、お願いいたします。

カナダ各地の学校めぐりシリーズ (9)

ニューブランズウィック州・マウント・アリソン大学

カナダの東海岸にあるニュー・ブランズウィック
州。その東のはずれに、サックビルという小さな町
がある。マウント・アリソン大学は 1843 年に、こ
の小さな町に創設された。四年制の小規模大学で、
学生総数は 2000 人余り。毎年「マックリーズ」
の大学特集では、充実した小規模大学として一位、
または二位のランクにあがり、当大学の誇りになっ

大江 都（マウント・アリソン大学）
ている。大学のあるサックビル市は人口わずか
5300 人余りであるから、この町がいかにか大学を中
心に動く、「大学町」であるかを想像していただい
けると思う。学生の八割は、キャンパスの周辺に散
在する寮に住み、大都市の埃から離れた、快適な生活
を送っている。

ここでの日本語講座は、1993 年に開講された。

初めの年は初級のみ、二年目からは初級・中級の2レベルとなった。開講の当初より、講座すべてをまかされるという誉れある仕事をやらせていただき、現在に至っている。受講する学生数は、初級約40人。これを二クラスに分けて各クラス20人。中級は15人前後でひとクラス。初級、中級とも、一週間に授業が3時間、ラボが1時間、秋学期、冬学期を通しての一年コースである。

中級までの講座しかないため、日本語を専攻科目とすることはできないが、日本経済、日本史、地理など、他の科目の単位と組み合わせ、日本研究学を副専攻とすることができる。

日本語講座を取る学生は、広範囲に及んでいる。人文系の学生のみならず、数学、物理等の理科系、あるいは、音楽、美術を専攻する学生も毎年含まれる。その半数は、日本語講座を自由選択科目として受講するが、他の半数は、すでに述べた日本研究学の必修科目、あるいは国際関係学の必修選択科目として受講する。

学生の文化、言語の背景も広範囲である。大学全体の学生の構成がそのまま日本語講座にも反映し、毎年、クラスの約6割はカナダ、アメリカからの英語系学生、その他は仏系、または、中国、韓国をはじめとするアジア系の学生たちである。この、バラエティに富んだ学生の構成は、それだけでクラスを豊かにしてくれる。学生にとっても教師にとっても、刺激的で楽しいクラスが出来上がる。

主要教材は「みんなの日本語I」で、1課から12課までを初級で、13課から25課までを中級で使用する。教科書のほかに、独自に作成した、文型の図式解説、動詞変化表、形容詞一覧表、補足語彙などを組み入れた小冊子を使っており、大学の本屋を通し、学生たちに購入させる。また、国際交流基金から寄贈された多数のビデオ・カセットがあり、日本文化紹介の貴重な副教材として使わせていただいている。

初級クラスに入る学生は、日本語に関してほぼ白

紙であるから、初めの一步は、ひらがな表の理解である。日本語の音の構成を学ばせ——これが、後に動詞の変化などを学ぶときに非常に大事な要素になることを説明しながら——ひらがな文字を覚えさせる。そして少しずつ文型を教え、語を入れ替えば、いろいろな文が作れることを示す。カタカナは秋の中間テストが終わった後、漢字は冬学期の一月から1週間に約10語の割りで勉強させていく。毎週一回のラボは、日本人学生をチューターに雇い、主に教科書各課の練習問題をやってもらう。

今年のひとつ、例年になく良いことがあった。専修大学の王伸子先生が客員教授としてマウント・アリソン大学に滞在された。その間、クラスで折々、発音の指導をしていただいたが、特に、中国語を背景に持つ学生たちは、母語との関係なども説明いただき、ありがたく恩恵に浴した。

さて、一年の後半の冬学期になると、動詞もたくさん学び、毎日の活動を日本語で言えるようになるので、楽しくなる。二月から、エッセイを書く課題を与え、学年の最後までに一人一遍を仕上げ、文集にする。エッセイについての詳細は、CAJLE大会での研究発表(2004年、及び2005年)を参照いただきたい。

中級のクラスも、スタイルは初級に準ずるが、時間の許す限りシラバスから少し外れて、冒険をする。例えば、日本の新聞記事などを材料にして、時事問題、文化紹介をクラスで取り上げる。といっても、中級レベルでは、日本語の新聞記事をそのまま読んで理解する、ということは不可能(ではなくとも時間がかかりすぎる)であるから、記事に出てくるカタカナ、漢字の単語などから、概要を把握し、同じ内容を扱った英文記事を探して、それと比較しながら、内容を確かめていく。こうすると、文の詳細な読解ができなくても、日本の新聞の形態がわかり、また、同じ事項も、日本の新聞と北米の新聞とでは、違う視点から書かれることが多々ある、などがわかり、比較文化の勉強にもなる。学生に、朝日、

読売などの日本語ウェブ、および、Globe & Mail、New York Times などの英語のウェブから自在に記事を選ばせ、順番にプレゼンテーションとしてやらせる。これまでに、「日本の国連安全保障理事会の常任理事国入りについて」といった、一大国際問題、そして、「冬のソナタの人気の秘密」「スーパーマンの死」「ニューヨーク・ファッションと日本」といった文化・芸能記事も出てきた。「冬ソナ」論からは、日韓の歴史についても触れたから、話しはなかなか広く、深くなる。

中級レベルの学生たちは、日本語を学ぶ目標もはっきりしてくるので、セミナー式のこうした授業はやりがいがある。ただ、つい時間を忘れ、(教師も含め)しゃべり続ける、ということにもなるので、語学講座としては時間の配分に気をつけなくてはならない。

一年を通し、日本語講座では、いろいろな行事も主催する。毎年三月のスピーチ・コンテストは、他大学との合同であるが、その他、学内で、日本研究学に関係した先生、学生たちとの集い、あるいは、日本のフィルム鑑賞会などもやる。今年度は、オリジナル版「Shall we ダンス？」と、アメリカ版リメイク「Shall we dance?」の比較をやってみた。いろいろ意見が出て、おもしろかった。

ところで、マウント・アリソン大学には、日本の関西学院大学と提携した交換留学の制度がある。日本からの受け入れとして、数名を対象にした一年間の正規交換留学のほかに、三カ月の英語研修のプログラムがあり、50人前後の日本人学生が当大学のキャンパスを訪れる。もともと学生数2000人のキャンパスに、日本人学生が50人現れると、その影響は大きい。彼らはマウント・アリソン大学の学生と寮の二人部屋をシェアし、英語を集中的に勉強しながら、カナダ生活を体験する。ルームメートは、日本語講座の学生であることが多い。たった三ヶ月ではあるが、「来るほう・受けるほう」両方にとって、これは、大きな「出会い」である。毎日の生活

をともにし、同じ行事に参加し、飲んで歌い、食べて語り、という時を過ごす、三ヶ月の終わりには、涙の別れとなる。別れた後も通信は続き、ついには、再度、双方訪問し合う、というかけがいのない友人関係ができることがしばしばのようである。

これは、日本語クラスにも自然に反映し、このプログラムに関った学生たちは、日本をもっと知りたい、日本語をもっと話せるようになりたい、と心から思うようである。毎年必ず、学生たちの書くエッセイにも現れ、その様子が伝わってくる。日本への関心、理解を深める素晴らしい交換プログラムがあることは、まことに幸いである。

話を日本語クラスにもどすが、こうした種々の経験をつんだ後、三月に入り学年末が近づくと、初級も中級もクラスの雰囲気は高潮する。学んだことを少しずつ使えるようになり、充実感が生まれてくるようだ。しかし、もっとやりたい、と思うところで、毎年、終了となってしまふ。特に中級のクラスでは、翌年に続く上級レベルがないので、卒業する学生以外はみな終了を残念がる。それを救うため、要望の多い年には、ノン・クレジット、教師も無料で奉仕という「ワークショップ」を設定する。会話力の養成を目的に、文法を少し横に置いて、コンテキスト中心の会話演習といったことを行う。

さて、締めくくりとなるが、学年末の試験の際、日本語講座についての意見、感想を学生たちに書いてもらう。「会話の練習時間が足りなかった」、「もっと日本文化紹介のフィルムを見たかった」等などが指摘される。特に、会話練習の時間が足りない、というのは、教える私自身、常に問題と考えることで要改善。また、それに関連するが、これまでのところ、文法も文化論も、内容を効率よく教えるということに重きを置き、説明はすべて英語で行い、授業は直説法を取っていない。今後は、英語解説と直接法の中庸をとることはできないか、試行していきたいと考えている。

そして最後に。問題は多々ありながら、学生たち

の意見、感想には、たくさんの良い評価もある。何よりもうれしいことは、毎年、「言葉以上のことを学んだ」「世界への視野が広がった」「説明はいつも明確でわかりやすかった」「こんなに遠くまで導い

てくれてありがとう」といった、コメントがあることだ。これらを読み、胸いっぱいとなり、では来年もがんばろう、と気持ちを新たにすの次第である。

BULLETIN BOARD

昨年の今頃は、ニューブランズウィック州サックビルでの生活が始まり、やっと落ち着いてきた頃だったと思い出しながら書いています。そういえば、もうすぐ子どもたちの学校も夏休みだという時期まで、冬のコートを着ていました。今、東京では、もちろん桜も散り、つつじも終わり、青々とした緑の木々が美しい季節になっています。気温もかなり上昇し、25度を越す日々が続いています。

そうこうしているうちに夏がやってくると、また会員のみなさまにお会いできる年次大会がやってきます。今回は、ご案内にもありますように BC 州に場を移し、ビクトリア大学を会場に催される記念すべき大会となります。すでに多くの発表者が予定されており、多くの方々が参加申込みをしてくださるのを、準備委員会役員一同、お待ちしております。とくに野呂博子大会委員長と、細かい準備をしてくださっているビクトリアの企画委員のみなさま、ありがとうございます。日本を始めとする北米以外から参加される方々も、近年、増えてきました。日本語教育の学会として、CAJLE も少しずつ「進化」してきている、と言えるのではないのでしょうか。

今号のニュースレターには、各地を巡回した宇田川先生がカナダの日本語教育事情を書いてくださっていますが、みなさまそれぞれの身近な内容でもあり、今後にもつながる大切な内容が盛り込まれています。それに関連し、新しく CAJLE の部会として立ち上げたアトランティック部会を大江先生が紹介してくださっています。NB のマウント・アリソン大学についてもお書きくださっていますので、東部カナダ、とくにアトランティックに焦点があてられている記事が出揃い、これもまた CAJLE の今後の姿として注目していただければうれしい限りです。カナダでの日本語教育現場に関する報告といえますと、楊先生のアニメに関する分析とカナダの日本語教育における位置づけには、みなさん、深くうなずきながらお読みになるのではないのでしょうか。我々としても、この、アニメという存在を、上手に味方につけて学習者をリードしていきたいものです。その楊先生のいらっしゃるカルガリー大学で貴重な経験をされた鈴木「先生」も、心打たれる経験を書いてくださっています。どうぞ、それぞれの内容をじっくりとご覧ください。さらに、CAJLE の新しいホームページについてもご案内させていただいています。ページに関してご意見がありましたら、ぜひともお寄せくださいませ。

会長代行：王 伸子

編集部便り

★ この編集部便りを日本で書いています。NL30号の編集の最後の追い込みの最中に楊編集長と西島編集委員に仕事をオマカセして、カルガリー大学の学生21人の引率で日本に来ました。学生は新しく覚えた表現や発見、体験したことを毎日目を輝かせて話してくれます。私も前にCAJLEの大会でお会いした会員の方の研究室や授業にお邪魔して、学生と同じように収穫の多い毎日を過ごしています。8月の大会でお会いしましょう。(サマレル)

★ 短い春を楽しむ間もなく、トロントに突然強烈な暑さが襲い掛かりました。皆様お元気でいらっしゃいますでしょうか。今年は2ヶ月の間に2度の洪水に襲われるという不運に見舞われ、意気消沈していましたが、緑豊かなトロントの春、夏を迎え気持も新たにしております。今回のNL編集には、全くと言っていいほど関わっていない怠け者編集委員ですが、「せめて編集部便りは書きなさい」と編集長からのお達しにより、遠慮気味に書いています。皆様にお楽しみいただける物が出来上がっていると信じて、NL30をお届けいたします。ピクトリアでお会いいたしましょう。(杉本)

★ いつもながら、ニュースレターに寄せられたり、お願いして書いていただいた原稿を拝読しながら、日本語教育の現場からのさまざまな考察に、大変良い刺激を受けています。私のように、普段は孤軍奮闘で日本語を教えている方も少なくないと想像しています。さまざまな状況で日本語に携わっている方々から、それぞれに違った日本語教育の断片を伝えていただくことで、知識や理解を深め、より広い視野をもつことができるものと、感謝しつつ編集作業を終えました。今後も、多くの方々からのお便りをお待ちしております。(西島)

★ この春から、CAJLE ホームページの担当も任せられる運びとなりました。勤務している大学の関係部門が親切に専用のサーバスペースを提供してくれたこともその大きな理由の一つです。ニュースレターの編集同様、「Webmaster」の役目というのも、会員の皆様が提供してくださった内容を迅速に、かつ読みやすい形で公共の場に出すというものだと考えております。皆様からの熱心な提案、批評、そして投稿を心待ちにいたしております。いまだ一度も覗いていない方、ぜひさっそくにでも www.cajle.org とクリックしてください。(楊)

《会 員 規 定》

カナダ日本語教育振興会は、カナダにおける日本語教育の発展と向上を目指す非営利組織です。日本語教育に関心のある方ならどなたでも会員として登録することができます。

会費年度：2005年6月～2006年5月

年会費：連絡先がカナダの場合...CAD\$40.00、アメリカ及び南アメリカの場合...US\$40.00、
上記以外の場合...US\$60.00 (いずれも郵送の場合は小切手または money order で)

申込必要事項：氏名 (日本語およびローマ字)、現住所、電話およびファックス (自宅、職場の両方)、
電子メールアドレス、所属機関。

申込先： Canadian Association for Japanese Language Education (CAJLE)
c/o NAJC, Toronto Chapter, 382 Harbord Street, Toronto, Ontario, M6G 1H9 CANADA

お問い合わせ: Tel: 416-516-8146 E-mail: suzu@eol.ca (鈴木)

Tel/Fax: 416-265-8452 E-mail: tonami@rogers.com (渡並)

(入会申込書は、ホームページをご覧ください。 <http://www.cajle.org>)

カナダ日本語教育振興会 (CAJLE)

ニュースレター・30号 発行日：2005年6月10日

編集：CAJLE Newsletter 編集部 Copyright: CAJLE (2005)